

## 第 28 回日本心臓核医学会 (JSNC) 学術大会印象記 (7/6~7)

中田 智明  
Nakata Tomoaki

第 28 回日本心臓核医学会 (JSNC: The Japanese Society of Nuclear Cardiology) 学術大会は、虎の門病院放射線科丸野廣大先生を大会長に、東大構内にある伊藤国際学術研究センターで 2018 年 7 月 6~7 日に開催された。以下、筆者が参加したプログラムを中心に報告したい。初日は若手研究者奨励賞 (YIA: Young Investigator Award) 審査講演 3 演題から始まった。冠疾患と透析患者における心筋血流 SPECT イメージングによる予後予測 2 演題の後、東京女子医科大学の山本篤志先生がアンモニア PET と CTA (CT 冠動脈造影) の fusion imaging による非虚血部位の壁運動異常が、負荷時 LVEF (左室駆出率) の低下に関与していることを明らかにし、今回の YIA の受賞に至った。続いて一般演題 3 演題はアンモニア PET で、定量的指標の有用性は文献的にも高い評価が得られており、本邦でも少しずつ普及しつつあるようだ。ただ、日常臨床では保険償還の問題はあり、また定量指標としての CFR (冠血流予備能) は健常者とオーバーラップが多いので、ここの症例での判定には何らかの正規化が必要であろう。イブニングセミナーは、東京医科大学八王子医療センター循環器内科の田中信大先生から、安定冠動脈疾患に対する PCI における虚血評価の重要性と題して、負荷シンチ、FFR (部分冠血流予備量比) の歴史的経緯、有用性と課題について解説された。両者の使い分け、相補性について解説された。特に、FFR カットオフ値について、PCI (冠動脈インターベンション) の適応 0.80 と予後改善の適応 0.64 は異なることを示した。初めての、アジアセッションでは、台湾 Chang Bing Show Chwan Memorial Hospital の Guang-Uei

Hung 先生から、PCI 前の負荷検査が 60% 位、その 80% が負荷シンチと報告があり、かなり活発に利用されていることに大変感心した。中国 The Nuclear Medicine Branch of the Chinese Medical Association の Ping Wu 先生からは、中国でもアンモニア PET 研究が始まったとの紹介があり、今後日米欧に追いついてくるであろう。学会 2 日目、モーニングレクチャーでは、東海大学医学部 専門診療学系画像診断学の橋本順先生から、新規に FDG PET が適応になった、希少疾患である高安動脈炎と巨細胞性動脈炎 (旧名: 側頭動脈炎) である大型血管炎 (7,000 例位と推定されている) における解説があった。多少制限はあるが、診断困難例、局在性と活動性、ステロイド効果判定に有用性が高いとのこと。続いて心臓サルコイドーシスの FDG PET 診断に関する委員会報告と心臓核医学検査に伴う医療被ばくに関するワーキンググループ報告があり、前者では前処置と画像判定法で、偽陽性の回避が図られていくことが期待され、また後者では不必要な被ばくの回避・しかし過剰な検査制限も回避し、患者利益のために医療被ばくを最適化する必要性が示された。ランチオンセミナーは 4 演題、筆者は心臓核医学の医療経済効果の座長を担当し、東京大学大学院医学系研究科 医療経済政策学講座の田倉智之先生、慶應義塾大学医学部循環器内科の香坂俊先生から、本邦の医療費・経済問題、機能的な心筋虚血評価の重要性、医療の最適化の重要性が解説された。今後更に、関連学会が共同して、費用対効果を吟味した EBM (科学根拠に基づいた医療) の構築・循環器診療の最適化を求めていく必要があると感じた。その他のランチオンで

は、最新の半導体 SPECT の話題と適正な負荷法の解説があった。午後のセッションは、米国心臓核医学会 (ASNC: The American Society of Nuclear Cardiology) から演者を招いた JSNC-ASNC ジョイントセミナーで始まった。PCI と機能的心筋虚血評価の議論が、日米英、台湾の各先生からあり、虚血評価、PCI 適応で日本の立ち位置が遅れていると感じた。また、今年の JSNC 学会賞は国立循環器病研究センター放射線部の木曾啓祐先生が受賞し、心電図同期 SPECT による独自の mechanical dyssynchrony 評価法の考案と臨床評価について高く評価された。今後の活躍が期待される。午後後半は、スイーツセミナーは日本大学循環器内科の依田俊一先生から、心筋虚血の定量評価の予後改善予測、適切な治療指標になることを自施設のデータベースを構築して解説された。最後に、特別講演は放射線医学総合研究所 計測・線量評価部 イメージング物理研究チームの山谷泰賀先生で、部位別 PET として、ヘルメット型頭部専用機や従来の MRI に装着できる頭部 PET で、MRI/PET に少ない経費でアップグレードする技術が紹介された。また、次世代 PET リアルタイムイメージングの可能性について解説が

あり、コンプトンイメージングも利用した研究には驚いた。その他、一般演題 4 セッション—心筋血流、MIBG、技術、半導体 SPECT、心機能—があり、熱心に討論された。

当日は台風崩れの低気圧と梅雨前線で、西日本中心に大雨のため交通機関が乱れ、参加できなかった先生も少なくなかったようだ。被害にあった方々にはお悔やみを申し上げたい。それでも 250 名近い参加があり、2018 年度の診療報酬改定でも機能的心筋虚血検出の重要性が再評価され、世界的トレンドに日本も追いつく機運が感じられた学会であった。来年は海の日連休前にあたる 2019 年 7 月 12~13 日函館市において、筆者がお世話して開催される予定である。土方歳三、榎本武揚、新島襄、ペリー提督等幕末のゆかりの地、下田と共に鎖国から解放された地である異国ロマンが残る地、五稜郭公園と朝市に代表される新鮮なシーフードの街、函館でお会いできることを楽しみにしています。

(社会福祉法人函館厚生院  
函館五稜郭病院 病院長)